

# 学会レポート

## 「游於芸：十一至十四世紀士人<sup>1)</sup>的文化活動與人際網絡」國際學術研討會參加記

平田 茂樹

2015年6月12・13日、台湾の長庚大学にて「游於芸：十一至十四世紀士人的文化活動與人際網絡」國際學術研討會が開催された。本会議は長庚大学の黄寬重氏が進めてきた三年間にわたる研究プログラム「游於芸：十三至十四世紀士人的文化活動與人際網絡」が最終年を迎えるに当たって開催された国際会議である<sup>2)</sup>。

この研究プログラムは黄寬重氏の他、吳雅婷（暨南国際大学）、許雅惠（台湾大学）、陳雯怡（中央研究院）、陳韻如（故宮博物院）、廖咸惠（清華大学）各氏の台湾研究者が主要メンバーを構成し、海外から研究協力者として、鄧小南（北京大学）、吳松弟（復旦大学）、藍克利（Christian Lamouroux フランス高等社会学院）、魏希德（Hilde De Weerdт ライデン大学）、近藤一成（早稲田大学）、青木敦（青山学院大学）、飯山知保（早稲田大学）諸氏、及び筆者などが名前を連ねている。研究計画書（内部資料）を拝見する限り、この研究プログラムの構想は2009年台湾の中央研究院で開催された国際學術會議「新政治史研究的展望」に端を発している。この会議開催に当たり、鄧小南、黄寬重、藍克利、魏希德、近藤一成各氏、筆者などの間でE-mailの交換があり、そのやりとりを踏まえて開催されたこと記憶している。中国史研究の領域の細分化と専門化の進行に伴い、狭い領域内での交流が主流となり、大きな視野に立った研究が少なくなって来ていること、研究の主流がかつての政治史、経済史から社会史、文化史へと移り、政治史の再生が急務となっていること<sup>3)</sup>、若手研究者の養成のため、新しい研究視角、方法論の開発、史料分析力の向上が求められていることなどについて、会議当日、長時間にわたって議論を重ねた。その議論を踏まえ、中国、台湾、欧米、日本それぞれに企画して共同研究を進めることが決まり、北京大学、オックスフォード大学、日本の早稲田大学、宋代史研究会夏合宿の場<sup>4)</sup>などを借りて、新しい研究方向の模索が続けられて来た。今回の長庚大学の国際会議もその一環として位置づけられる。

次に、長庚大学で行われた会議のプログラム（用語については中国語の表現をそのまま使用するが、再出表現は適宜省略）を紹介することとしたい。

6月12日

第一場「社交網絡（Ⅰ） Social Networks（Ⅰ）」

主持人 Chair：包偉民（中国人民大学歴史学院）

1. 報告人 Presenter：胡坤（西北大学歴史学院）「宋代的薦挙書啓：探索改官人際網絡の線索」

討論人 Discussant：包偉民

2. 報告人：Beverly Bossler（Department of History, University of California, Davis）

“Throwing a Brick and Attracting Jade”：Letters, Poems, and Social Relationships in the Writings of Yao Mian（1216-1262）

討論人 劉祥光（政治大学歴史学系）

3. 報告人 黄寬重（長庚大学人文及社会医学科）：「以芸会友：南宋中期士人对<蘭亭序>的品題與人際關係」

討論人：包偉民

第二場「社交網絡（Ⅱ）」

主持人：Beverly Bossler

1. 報告人：Patricia Buckley Ebrey（Department of History, University of Washington）

Zhu Xi’s Colophons on Calligraphy and Visual Culture of Literati Life

討論人：Beverly Bossler

2. 報告人：盧慧紋（台湾大学芸術史研究所）「金末元初北方士大夫の書画活動と鑑蔵」

討論人：陳韻如（故宮博物院）

3. 報告人：陳雯怡（中央研究院歴史語言研究所）「由詩卷到總集—元代士人的社会網絡与交友文化」

討論人：Beverly Bossler

第三場「華北社会（Ⅰ） Society of North China（Ⅰ）」

主持人：方震華（台湾大学歴史学系）

1. 報告人：小林隆道（京都大学人文科学研究所）：「顯隱相交—《玄妙觀重修三門記》撰者牟巖一族与宋元士人社会—」

討論人：方震華

2. 報告人：王錦萍（新加坡国立大学歴史系）

Daoist Jiang Shanxin and the Temple Network of Ancient Sage-Kings in Southern Shanxi in the Fourteenth Century

討論人：桜井智美（明治大学）

3. 報告人：吳国聖（台湾大学歴史学研究所）「承事郎常謙、太医常惟一墓誌考釈：一個元代医学世家的家族史與人際網絡」

討論人：方震華

第四場「華北社会（Ⅱ）」

主持人：鄧小南（北京大学歴史学系）

1. 報告人：山根直生（福岡大学史学科）「試論宋代士人

之前形態—以五代洛陽張全義一党為例—」

討論人：鄧小南

2. 報告人：許雅惠（台湾大學歷史學系）「宋代士人的文化實踐—以陝西藍田呂氏家族為主的考察」

討論人：鄧小南

3. 報告人：飯山知保（早稻田大學文學學術院）

Legitimizing Ancestry: Transition of Ancestral Narratives and Genealogy Complication in North China beyond the Yuan-Ming Transition

討論人：洪麗珠（科技部人社中心）

6月13日

第五場「知識建構（I） Knowledge Construction（I）」

主持人：劉靜貞（成功大學歷史學系）

1. 報告人：胡勁茵（中山大學人文高等研究院）「范曄、司馬光「樂中公案」探析」

討論人：劉靜貞

2. 報告人：黎晟（北京大學歷史學系/淮陰師範學院）「經籍、圖譜與想像—宋代三代「圖像的一般知識」的獲得、傳播與重構」

討論人：許雅惠

3. 報告人：吳雅婷（暨南國際大學歷史學系）「十一至十四世紀譜錄所見的誦史」

討論人：劉靜貞

第六場「知識建構（II）」

主持人：Patricia Buckley Ebrey

1. 報告人：廖咸惠（清華大學歷史所）「知識的分類與界定：宋代士人與小道之學」

討論人：Patricia Ebrey

2. 報告人：易素梅（中山大學歷史學系）「宋代的士人與醫方」

討論人：陳韻如（中央研究院歷史語言研究所）

3. 報告人：Hilde De Weerd (Department of Chinese History, Leiden University)

Continuities between Scribal and Print Publication in Twelfth-Century Song China—The Case of Wang Mingqing's Serialized Notebooks

討論人：Patricia Ebrey

第七場「文化交流（I） Cultural Communication（I）」

主持人：何忠禮（杭州社科院南宋史研究中心）

1. 報告人：劉靜貞「呂祖謙和他的友人」

討論人：黃寬重

2. 報告人：平田茂樹（大阪市立大學大学院文學研究科）「南宋士大夫的人際網絡與交流—以魏了翁「靖州居住」時期為線索—」

討論人：何忠禮

3. 報告人：曹家齊（中山大學歷史學系）「宋代士人的私人通信與遊訪—立足於相關制度與社會背景之考察」

討論人：何忠禮

第八場「文化交流（II）」

主持人：Hilde De Weerd

1. 報告人：劉晨（哈佛大學東亞系）「私藏與共用—蘇軾題跋研究」

討論人：Hilde De Weerd

2. 報告人：陳韻如「題跋文化與畫史建構：十二到十四世紀的宋徽宗形象」

討論人：Hilde De Weerd

3. 報告人：近藤一成（早稻田大學文學學術院）「宋元交替與文天祥問題概要」

今回の會議の参加者は40名ほどであったが、中国の宋史研究会の前会長鄧小南、現会長包偉民、アメリカの宋史研究の中心的位置を占める Patricia Ebrey, Beverly Bossler, ヨーロッパの宋史研究の中心的人物である Hilde De Weerd 各氏が参加したほか、30-40代の若手報告も多く、報告者、Discussant、及びフロアの参加者の間で充実した討論が行われた。

個々の内容に立ち入ることはここでは避け、全体的な印象について以下、簡単に述べることにしたい。

テーマとしては「社交ネットワーク Social Networks」、 「華北社会 Society of North China」、 「知識建構 Knowledge Construction」、 「文化交流 Cultural Communication」であり、合計23本の報告<sup>5)</sup>があった。士人のネットワーク、コミュニケーション、文化活動が本プロジェクトの大きな柱となっている一方、「華北社会」がパネルとして設定されたのは、中国史の学界において中国の華北と華中・華南では歴史発展の方向が異なるという認識が近年強まり、石刻史料の多く残る山西省を中心に遼金元の社会結合や信仰などをめぐり、新たな視角が提示されるようになってきた研究動向を反映している。

その他、全体的な特徴をいえば、第一に、報告の範囲は11世紀から14世紀という中国の宋、元、明時代にまたがる時期<sup>6)</sup>であり、特に南宋から、元の時期における士人の文化活動やネットワークが中心となっていた。近年、中国史の学界においては王朝史の枠を越えることを目指した学術會議の開催が行われるようになっており、昨年6月ハーバード大学で開かれた大規模な中国史の国際會議「CONFERENCE ON MIDDLE PERIOD CHINA, 800-1400——九至十五世紀的中国會議」は唐末から明末までを一つの時空世界として議論しており、相共通する部分がある。大胆に整理するならば、かつて中国史の学界においては唐代と宋代の間に政治、社会、経済、文化上の大きな画期があり、それが宋、元、明、

清と続く王朝の基盤を形作ったとする唐宋変革論が時代区分の有力な学説と見做されてきた。現在、明清史研究者は、唐宋変革の時期よりも、新大陸の物産や銀の流入を契機として東アジアが世界の経済システムに組み込まれ、なおかつ現在の社会の伝統がこの時期に形成されるという考え方をもとに明末清初期に大きな画期を見いだそうとする説（「明末清初近世論」あるいは「中国伝統社会形成論」<sup>7)</sup>を出している。その説を受ける形で、唐宋変革の後、明末清初期までどのように移行していったかという「宋元明移行」問題が重要な課題とされており、今回の会議もそうした問題意識の反映と見做すこともできる。

第二に「游於芸」（芸に遊ぶ）という表題に示されるように、士人の様々な文化活動に焦点が当てられている。この問題意識は廖咸惠報告の「小道」という表現に的確に表されている。当時の考えでは儒学は「正道」と見做されたのに対し、その他の仏教、道教などの宗教・思想や文学、書道、絵画、医術、易、風水などの文化活動は「小道」と見做され、士人が本来学ぶべきものではないと考えられてきた。宋代頃になると、「小道」を学び、楽しむことを士人たちが肯定的に捉えるようになり、士人の多元的な文化が開いていくことになる。言葉を言い換えるならば、「游於芸」＝「小道」への視座は、従来の儒学を中心とした中国社会理解に対し、「周縁的文化」から中国社会を捉えようとする試みと見做すこともできる。今回、報告のテーマに文学、絵画、医学、方術などの領域が列ねているとともに、その関係で従来余り使われてこなかった手紙（胡坤、Beverly Bossler、筆者）、題跋（劉晨、陳韻如、Patricia Ebrey）、序（黃寬重）、譜録（吳雅婷）、総集（陳雯怡）、図譜（黎晟）、絵画（陳韻如）、石刻史料（小林隆道、飯山知保）、考古史料（許雅惠）などを新たな史料として積極的に用いる研究が目についた。

第三に「交遊圏」という方向性が提示された。従来の中国史研究においては、新法党、旧法党といったような「朋党」に関わる政治的關係以外では、「家族（宗族）關係」、「婚姻關係」あるいは「学派關係」などに関心が集中して来た。これらの成果は、例えば1980年代、アメリカのロバート・ハイムズが北宋の中央志向型のエリートとは異なり、南宋のエリートは自己の郷里を中心とした地域社会内で婚姻關係を結ぶ傾向が強く、またさらに地域社会内の各種の社会事業を通じて自らの社会的地位を獲得しようとするローカリエリート化するとの学説<sup>8)</sup>を提示し、学界に大きな影響を与えたが、今回「交遊圏」という視点からの報告を聞く限り、「婚姻關係」の範囲とは異なるネットワークへ目を向ける必要性を強く感じた。「婚姻關係」以外では別に学問的關係の問題も存在している。日本においては市来津由彦氏が道学の学問ネッ

トワークの問題を「講学ネットワーク」の観点から精力的に分析している<sup>9)</sup>が、その成果を見る限り、士人たちのネットワークは「婚姻ネットワーク」「文化ネットワーク」、「学問的ネットワーク」それぞれに様相を異にしており、これらのネットワークを総合的に捉える必要がある。「交遊圏」という視座において、劉静貞報告は示唆に富む内容となっていた。第一が「友」への着目である。友という用語自体は古くから存在するが、劉氏の指摘するとおり、宋代頃、特に南宋の文集などにおいて「友」という語が頻出するようになってくる<sup>10)</sup>。新たに登場してくる多様な「友」關係を捉えるのは宋代史の重要な課題であり、そのために、劉氏は『文集』に収録されている墓誌銘、行状、手紙、題跋、序などを総合的に分析する必要性を提言している。恐らくこうした作業を通じて、宋代に現れる新たな学問的ネットワークや文化的「交遊圏」の問題が明らかになるとと思われる。

第四は「地域性」への視座である。華北社会が一つのテーマとなっていたのは、その代表であるが、現在は中央と地方との關係、中国各地の地域性といった問題に目が向けられるようになってきている。拙論の報告に対して、フロアから「何故、魏了翁が「靖州居住」という処罰を受けた特殊な時期、及び辺境というべき「靖州」の事例を取り上げるのか」という質問を受けたが、次のように返答した。本報告は、処罰を受けたという特殊事例であるが、そのため政治的交流が比較的少なく、魏了翁のこの時期の活動は学問的交流、文化的交流が中心となっており、士人のネットワークを考える上で格好な素材であること、また「靖州」から中国全土を見るという、辺境からの視座は現在の新たな研究傾向とも符合するのではないかと述べた。今までの宋代史研究は、中央集権的支配を前提に、全国を一元的な体制の元に捉えようとする傾向が強かった。しかし、実際に近年出されている成果を見る限り、北宋において既に中央あるいは中心と異なり、辺境においては別のシステムに基づいて社会が動いており、また各地域間の差異が大きいことが判明しつつある。これが南宋になるとその傾向は強くなり、より地方分権的な様相を呈しはじめる<sup>11)</sup>。従って、この地域からの視座もしくは「地域性」への視座が一層重要となっていくと考えられる。

以上、会議の様子について簡単に述べた。紹介は最小限に止めたため、深く立ち入ることができなかったが、考古学の出土品が近年増加している成果を踏まえた、許雅惠、黎晟各氏による美術考古学の報告、音楽史（胡勁茵）、医術史（易素梅、吳国聖）、交通史（曹家齊）など内容は多岐にわたっており、士人の文化活動やネットワークの内実が次第に明らかになってきていることを物語っている。また吳雅婷報告は譜録を用いた分析であったが、その前提として宋代頃より盛んとなる旅行が譜録文化を

発展させたことを述べており、主要幹線道路に設けられた旅館、邸店などとは異なり、一般道路においては寺などが旅行の宿泊施設として用いられたことを指摘した曹家齊報告などとともに、旅行といった要因も重要なテーマであることを示してくれる。

最後に、今回、日本からは山根直生、小林隆道、桜井智美各氏と筆者が参加したが、レベルの高い国際会議へ数多くの若手研究者が参加し、世界の学界で検討されている新しい課題に積極的に触れていくことを期待したい。

## 注

1. 前近代中国社会の儒教的エリート階層を中華圏の研究者は「士人」と表現し、欧米の研究者は「elite」、日本の研究者は「士大夫」と表現することが多く、文中において表現が混在していることをあらかじめ断っておく。
2. プログラム名と国際会議の名称が若干異なるのは、本来研究プログラムが南宋から元にかけての士人の文化活動とネットワークに焦点を当てたものであったのに対し、国際会議は宋から明までの士人の文化活動とネットワークを対象を拡大して討論が行われたからである。ただ、研究計画書を見る限り、アメリカで出された新しい時代区分の考え方である「宋元明転折論」(*The Song-Yuan-Ming Transition in Chinese History* Edited by Paul Jakov Smith Richard von Glahn, Harvard University Press, 2003)を意識しているようであり、これまで出されてきた時代区分論である、「唐宋変革論」もしくは「南宋交替論」、「明末清初変革論」の間の宋元明の移行を考えようという姿勢を示しているように見受けられる。
3. 宋代史を中心とする国際的な共同研究の取り組みとしては二つの方向が存在している。一つが「政治史の新たな視野」を追究する方向であり、筆者が関わったものだけでも2009年8月に台湾中央研究院にて開かれた「新政治史研究的展望」の国際会議、2010年8月に武漢大学にて開かれた宋史年会内の「宋代行政運作的日常秩序」のパネル、2012年8月に北京大学で開催された「中古時期的日常秩序」国際青年学術研究会、同8月河南大学にて開かれた宋史年会内の「政治空間変化と南宋政治運行」のパネル、2013年9月に北京大学にて開かれた「宋代政治史研究的新視野」の国際会議、2014年8月に杭州師範大学にて開催された宋史年会内の「南宋皇帝権再認識」のパネルがあり、鄧小南、曹家齊両氏とその成果の一環として『文書・政令・情報通信—以唐宋时期為主—』(北京大学出版社、2012年)を公刊するとともに、宋代政治史の新しい視野ならびに方法論については『史学月刊』401(2014年第3期)に「宋代史政治史研究」新視野筆談」として黄寛重、劉静貞、王瑞来、曹家齊各氏と筆者が論考を寄せている。もう一つが社会史、文化史を中心とした士人の文化活動やネットワークに視野を向けたものであり、本文の台湾の会議の他、筆者が関わったものとして2014年1月オックスフォード大学で開催されたPembroke Workshop, Oxford: Letters and Notebooks as Sources for Elite Communication in Chinese History, 900-1300と2014年12月に台湾国立清華大学にて開催された「筆記と宋人知識建構」国際ワークショップをあげておく。こちらは士人の文化活動やネットワークに目を向けるとともに、筆記、手紙などの新たな歴史史料の可能性を追求している。
4. 日本も国際共同研究の一翼を担っており、2013年3月早稲田大学での日本、台湾の研究者の交流会議、8月伊東市で開かれた宋代史研究会夏合宿、2015年8月大阪市立大学で開催された日本・台湾の研究者の交流会議、福岡市で開かれた宋代史研究会夏合宿など、日本、台湾の中国史研究者の間で交流活動を継続的に重ねている。その成果の一環として、『中国伝統社会への視角』(汲古書院、2015年)が刊行されている。
5. プログラムには近藤一成氏の名前があるが、近藤氏は事情があり欠席されたため、報告は23本である。
6. 山根報告は五代なので、厳密には五代からとなるが、五代の終焉が10世紀後半なので、11世紀という表題の共通時代からは外れている。
7. 両説の概要については岸本美緒『風俗と時代観』(研文出版、2012年)並びに伊藤正彦「『伝統社会』形成論—「近世化」論と「唐宋変革」」(『新しい歴史学のために』283, 2013年)参照。
8. Robert Hymes, "Statesmen and Gentlemen: The Elite of Fuchou, Chiang-hsi, in Northern and Southern Sung", Cambridge University Press, 1986参照。
9. 市来津由彦『朱熹門人集団形成の研究』(創文社、2002年)参照。市来氏は朱熹と門人間の手紙のやりとりを中心にこの問題を考察している。
10. 日本においては、岡元司「南宋期の地域社会における「友」」(『東洋史研究』61-4, 2003年)の成果が出されているが、岡氏の成果は主として墓誌銘の分析に基づくものである。
11. 以前、拙論「南宋間の政治空間の変化について—魏了翁「応詔封事」を手がかりとして—」(『東洋史研究』72-3)にて次のようなことを指摘したことがある。宋代における「政治システム」の変化を明らかにするという命題を設定した場合、北宋の中央集権的官僚体制の下、「西北辺(軍)—中原の都(政治)—長江下流(財源)」を連結する広大な国家物流システムを基軸に展開した「開封システム」と、北中国を奪われた結果、江南の地方政権、別の表現をすれば狭い領域での軍事、政治、経済の緊密な連関から成り立つ南宋の「杭州システム」への変化という捉え方を提起することが可能と思われる。例えば、南宋においては、総領所・都督府・宣撫司など地方の軍事、財政を広域にわたって統括した官僚機構が出現し、北宋の路官以上の大きな権力を保持するいわば分権的な構造が出現する。以上のように、この論文では南宋の分権的な構造を強調したが、北宋においても中央と辺境の二元的な構造について検討する段階になってきている。